慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	日本語の感情形容詞とそれを述語とする文に関する一考察：中国語の訳文との対照
Sub Title	
Author	張, 維佳(Cho, Ika)
Publisher	慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター
Publication year	2013
Jtitle	日本語と日本語教育 No.41 (2013. 3) ,p.186- 186
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	大学院文学研究科日本語教育学分野修士論文要旨
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-00000041-0186

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学　日本語・日本文化教育センター紀要
『日本語と日本語教育』41：186（2013.3）

〔大学院文学研究科修士論文〕

日本語の感情形容詞とそれを述語とする文に関する一考察
―中国語の訳文との対照―

張　　維　佳

本論文は、日本語の感情形容詞文とその中国語訳の形態についての研究である。現代日本語における感情形容詞に関する先行研究を概観すると、時枝誠記が形容詞を「主観的形容詞」という概念と分類を提起し、その後西尾寅弥はそれを「感情形容詞」と呼び、「属性形容詞」との間に三つの分類基準を定め、研究が進められてきた。本論文は主に西尾が分類した日本語の感情形容詞の研究に基づきながら、日本語の感情形容詞について、日本語の感情形容詞に対応する中国語訳を対比しながら双方の表現形態について考察したものである。

本論文は、全体が 3 章からなり、各章の概要は以下のようになっている。

第 1 章では、日本語の感情形容詞における位置について述べる。本章は感情形容詞に関するさまざまな分類が行われている事例を取り上げて紹介し、その中で、特に西尾寅弥と北原保雄の説を検討し、感情形容詞の範囲と焦点を考察した。

第 2 章では、日本語の感情形容詞の構文について述べる。まず、日本語の形容詞文を補語の数から分類し、この中で感情形容詞が使えそうなもの、つまり「A は/が感情形容詞」構文、と「ハ・ガ」構文を取り挙げている。さらに、第 1 章と関連させながら、西尾の主張する感情形容詞の三つの判定基準をもとに、文のレベルからその特徴を観察する。日本語の形容詞文を構文面からその問題点を考察し、主に日本語の感情形容詞の品定めと中国語の使役連語表現に関する類似性を述べた。本章の最後の節では、特に興味のあるいわゆる一語形容詞文について述べている。

第 3 章では、日本語の文学作品から感情形容詞文の用例を収集し、中国語による翻訳からそれぞれに対応する例文を観察し、日本語の感情形容詞が中国語でどのように表現されているかを分類しつつ考察を行っている。

結論として、日本語の感情形容詞文を中国語に翻訳するとき、中国語の訳文では形容詞文以外、「想／要」「使役」「好／可形容詞」「感覚／覚得」「形容詞から動詞への転換」という五つの構文的なパターンが存在すると考えられる。また、その中には、寺村秀夫の言う感情形容詞の品定めと中国語における使役連語の使用には類似性があるのではないかと考えた。

本論文は、日本語の感情形容詞が実際に中国語でどう表現されているのかを対照させながら観察し、その表現の類型を明確にすることを目指してきた。これは、特に中国語を母語とする日本語学習者を対象に日本語教育を行う際には、感情形容詞文の意味と中国語との構造的な違いから生じる表現の違いを理解させることが重要だと考えられるからである。そこに研究の意義があったと考えている。